

## 学生自治の取り組みを広げ、 より良い学生生活、医師養成を実現しよう

### はじめに

全日本医学生自治会連合（以下、医学連）は、全国民の利益に基づき、医学生の利益を守るため活動しています。そのための交流や連携、情報収集・発信を絶えず行うとともに、全国各地の医学生の自治活動に支えられ、民主的に拡大・発展してきました。

医学連大会は、加盟校の学生はもちろん、より多くの医学生とともに自治会活動について交流したり、医学生を取り巻く状況や医師養成について学んだりしながら意見を出し合い、要求実現の道筋を決定する場です。

この決議は、今年 1 年間の「全国の学生自治会の取り組みや成果」と「医学連の活動や成果」を振り返ってまとめ、これから 1 年の活動の基本方針を掲げたものです。この決議の構成は、以下のようになっています。

はじめに .....	1
第 1 章 学生自治会、医学連の意義と魅力 .....	2
第 1 節 医学生の願いを集めて実現していく—各地の自治会活動の取り組みから— .....	2
第 2 節 全国の学生自治会に共通する切実な願いを実現—医学連の役割と取り組み— .....	3
第 2 章 医学生の切実な要求を実現し、学びがいのある医学部にしよう .....	5
第 1 節 新型コロナウイルスの医学生への影響—医学生が安心して学べる場を— .....	5
第 2 節 学生にとっても地域にとっても良い地域枠とは—管理より支援を— .....	6
第 3 節 学費値上げ、新修学支援制度に関する活動—学生が平等に学べる場を作ろう— .....	8
第 4 節 医学部入試不正問題—医学部における差別、ハラスメントを絶対に無くそう— .....	9
第 5 節 医学生が抱える不安と医学教育への参画—より良い医学教育の実現のために— .....	10
第 6 節 医師の過重労働—医療者自身の命と国民の健康を守るために— .....	11
第 7 節 学生の一一致する要求を伝える活動—医学教育や施設を充実させよう— .....	12
第 8 節 全国医学生ゼミナールの成功へ—学生の学びたいという要求の実現を— .....	12
第 9 節 平和と民主主義を擁護する—核なき世界の実現に向けて— .....	14
第 3 章 自治会活動、医学連の活動の発展のために .....	15
第 1 節 自治会活動の発展に向けて .....	15
第 2 節 サークル活動、学園祭、学習会、新歓など学生の自主的活動を活発に .....	16
第 3 節 自治会の建設・医学連加盟を進め、多くの医学生の要求を実現しよう .....	17
おわりに .....	18
全体討論 .....	19

## 第1章 学生自治会、医学連の意義と魅力

ここでは、学生自治会や医学連の基本的な活動や、その意義と魅力について各地の取り組みを交えながら述べます。

### 第1節 医学生の願いを集めて実現していく—各地の自治会活動の取り組みから—

学生自治会の取り組みは、各大学の状況に応じて多様なあり方、活動の仕方がありますが、学生自治会活動の共通する性質として①学生の一致する要求で力を合わせる、②規約に基づいた民主的な運営をすることが挙げられます。

#### ① 学生の一致する「要求」で力を合わせる

大学生活を送っていると、その中で様々な不満や要望が生じてくることと思います。「特定の学年のカリキュラムが厳しすぎる」「過度なストレスや不安を感じながら授業やテストを受けざるを得ない毎日が続いている」「臨床実習を充実させてほしい」といったカリキュラム上の問題、「老朽化している施設を改修してほしい」「自習室や駐車場を増やしてほしい」「部活動の練習場所がない」といった大学施設の問題、「学費減免制度が突然打ち切られた」「新専門医制度に関する十分な説明がなく不安を感じる」といった制度的な課題などです。

こうした声のうち、学生個人の意見では解決が難しい問題を愚痴で終わらせず、その大学の学生みんなの共通の願いと捉え、実現を目指す組織が学生自治会です。学生自治会は学生一人ひとりの声をアンケート等で広く集め、考えの違いを前提としながらも一致する要求を見出し、医学生の総意として大学側と交渉していきます。このような体制を取ることで、学生全員がより良い大学づくりに参加していくことができます。

群馬大学医学部医学科学友会では授業や大学施設・学生生活に関してアンケートをとり、その結果を学友会主催の「医学科学友会と教職員との懇談会」にて学生の声として伝えていきます。今年度は2月に懇談会を開催しました。学長や学部長をはじめ、例年より多くの教職員に出席をいただき、また学生も役員以外に多くの出席があり、活発な意見交換がなされました。特に各種報道に取り上げられ問題となった科目については、アンケートで改善を訴える意見が多く寄せられていたため、他の科目などとは別に説明の時間と質疑応答の時間を設定しました。学友会は今後も確実に学生の声を集め、学生の総意として取りまとめつつ、懇談会などを通して大学側に伝えていきます。

#### ② 規約に基づいた民主的な運営により、大学づくりへの参加ができる

大学の自治とは、大学の全構成員の声を出発点として、より良い大学運営・学生生活を実現していくことです。大学の自治を担っているのは教授会や学務課だけではありません。「大学の全構成員」とは学生・教員・職員であり、それぞれの立場から大学運営に関わるとというのが本来のあり方です。学生は、学生自治会を通して、大学の自治と運営に参加することができます。

この仕組みの中で学生が大学の自治と運営に参加するために、学生自治会は「全員加盟制」をとっています。また、学生自治会の運営は規約に基づいた民主的な方法によって行われます。役員は選挙によって選出されるほか、学生大会などの議決機関も成立要件が定められており、一部の学生の考えだけでその方針を決定することができないようになっています。こういった手順を踏むことで、学生自治会による意見は全学生の総意として正当性を持つことが認められ、大学運営に関わることができるのです。

島根大学医学部学生自治会では、毎年規約に則り学生大会を開催しています。コロナ禍以前は対面で行っていましたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響によりオンデマンド形式に変更し今年で3回目の開催とな

りました。今年度は昨年度と同様、動画閲覧と質問回答期間を6日間、そのうち最後の2日間を投票期間としました。情報保護の観点から、普段の講義で利用している moodle 上に大会の資料、動画、投票フォーム、質疑応答フォームを共有する形で行いました。また、動画視聴をしてもらうための工夫として動画内にキーワードを入れて投票の際に選択してもらいました。オンデマンド形式ではいつでも何度でも資料や動画を確認できるため、学生が学生大会により参加しやすくなりました。しかし、終了ぎりぎりまで投票率が低く、また本当に動画を視聴しているか不透明というデメリットもありました。対面形式では、学生は学生大会へ参加することで一緒に大学の仕組みを作っているという感覚が得られますが、オンライン形式では学生自治への参加している感覚が薄れてしまったり、学生大会の仕組み自体が軽視されたりすることが危惧され、対面での学生大会より「自治」というものが見えにくくなるという課題も挙げられています。

学生の要望は必ずしもすぐに反映・実現されるとは限りませんが、学生と大学が互いの考えや求めるものを共有し、協力してより良い大学づくりを実現していくことが期待されます。

学生大会では1年間の活動のまとめ、これからの活動方針、予算等について学生全体で確認して決めることができます。一方で、学生大会を開くことは自治会役員にとっても自治活動の本質的な学習になり、民主的な運営を考えるきっかけにもなります。

今期は山梨大学、信州大学、島根大学、岡山大学、山口大学、香川大学、宮崎大学などで学生大会が行われました。大人数での集会が行えない状況下で、通常のやり方で学生大会を開催できない中でも、オンラインツールを活用するなど工夫し、大会を開催した大学が多く見られました。それだけでなく、オンライン開催としたことで気軽に参加しやすくなり、会場の問題が解決されてより多くの参加者を収容できるようになるなど、今後の学生大会の新たな可能性も示唆されました。また、感染対策を検討した上で、対面で実施した大学や、オンラインと対面を併用したハイブリッド形式での学生大会を行った大学もあります。これからも各大学の実情や感染拡大状況に沿った学生大会の実施形式を検討していく必要がありますが、特に2023年度においては新型コロナウイルス感染症に対する規制緩和に伴いより多くの大学が学生大会を対面開催できるようになることを期待します。

今後も継続して、またより多くの大学で、医学生が主体性をもって学生大会を開催できるよう、自治会全体でその意義を確認していきましょう。

## 第2節 全国の学生自治会に共通する切実な願いを実現—医学連の役割と取り組み—

### ① 医学生を代表する唯一の全国組織

医学連は、全国の医学部・医科大学の学生自治組織の全国組織として1984年に結成<sup>1</sup>されました。現在、全国81医学部・医科大学のうち27大学の自治組織が加盟しています。結成以来、医学連はすべての医学生の権利を守り、発展させ、医学生の要求を実現するために活動してきました。医学生の要求は(1)学生の中で実現できる要求、(2)大学側と相談して解決できる要求、(3)国や関係諸組織・団体と交渉することで実現できる全国的な要求、というように大きく3つに分けることができます。3個目の要求は、学費や奨学金、地域枠制度、卒後臨床研修など全国の医学生の多くに共通する切実な諸課題がそれにあたり、個々の大学での取り組みだけでは解決しきれない切実な課題となっています。医学連は日本で「唯一の」医学部学生自治会の連合体だからこそ、全国の医学生と協力して、国や関係諸組織・団体と交渉することで問題を解決していくアプローチが期待されています。

---

<sup>1</sup> 医学連は①対等・平等の原則②思想信条の違いを当然の前提に一致する課題で行動する③行動に際しての相互批判の自由と行動保留の自由の三点を合意した。

医学連は全国の医学生の意見を集約し、様々な媒体や機会を利用してその声を発信しています。また、そこで得られた意見をフィードバックし、医学連の活動のさらなる発展につなげています。発信する媒体としては、医学連新聞、医学連ホームページや SNS など、機会としては省庁交渉、医学教育学会での演題発表、各種メディアからの取材などです。

### ▼医学連ホームページ、SNS

医学連では、医学連ホームページや SNS での継続的な情報発信に取り組んでいます。チームで広報を行う体制をとり、より充実した情報発信を目指しています。38 期には地域枠に関する医学連の取り組みを目にして、自らの悩みを医学連のホームページへ問い合わせしてくれた方が複数いました。そうした声に対して、役員が電話や ZOOM で困っていることやその経緯を聴き、中央執行委員会会議で協議し対応しました。今後も医学連の存在をより身近に感じてもらえるよう、また、医学生の拠り所となるような広報を続けていきます。

### ▼文科省、厚労省交渉

今期は 3 月 13 日に厚労省交渉、3 月 14 日に文科省交渉を行いました。医学教育や医師の労働環境に関する問題を中心に要求などを伝えました。詳細は 2 章 1～7 節を参照してください。

### ▼医学教育学会での発表

医学連は毎年、医学教育学会<sup>2</sup>に参加して演題発表を行っています。今年度は、第 54 回日本医学教育学会大会が 8 月 5 日から 6 日に G メッセ群馬で開催されました。医学連は「地域枠・地域の医師確保に関する学生への全国調査の結果および考察」という演題で 5 分間の発表と 3 分間の質疑応答を行いました。内容は 2021 年 12 月から 2022 年 4 月に実施したアンケートに基づくものです(61 大学 2270 名が回答)。地域枠での受験を検討した際に大学からの説明があったと答えたのは約 7 割で、都道府県からの説明については 5 割程度にとどまっていた結果などを紹介しました。学生が自分らしいキャリアプラン・ライフデザインを実現できる制度と、地域ごとのニーズに即した医療の実現に貢献できる制度、これらの両立をかなえられるよう、医学生と制度提供者のお互いが歩み寄ることが重要だと強調しました。参加者からは、「入学後の制度変更について初めて知った。地域枠についてこのような状況があることはかなり問題である。」などの感想が聞かれました。



### ▼メディアでのアピール

医学生の要求を発信する方法の 1 つとして、メディアを通じたアピールも積極的に行っています。38 期には、医学連が 2021 年 11 月に行った地域枠に関する記者会見の内容について、朝日新聞や m3.com などさまざまな媒体で報道されました。今後も医学連では積極的な調査によって医学生の状況を広く把握し、メディアを通じて社会に発信していきます。

2 一般社団法人 日本医学教育学会 <Japan Society for Medical Education> <http://jsme.umin.ac.jp/>

## ② 全国各地の学生自治会同士をつなぐ役割

医学連は各大学の学生自治会同士のつながりを作る役目も果たしています。個々の学生自治会で取り組んでいる活動の中では、困難を抱えることも多々あるのではないのでしょうか。そういった課題に突き当たったときに、他の学生自治会ではどのように活動しているのか、全国的にはどのような動きがあるのかといった情報を取り入れることで、活動のヒントが得られます。医学連の役員が各地の大学へ懇談に行った際には、「医学連の企画で、他大学の様子を聞いたりできるので良い参考になる」「自分の大学だけだとどうしても閉鎖的になってしまいがちなので良い機会だ」という声が多く聞かれます。また、改めて「自治とは何か」を医学連役員と共に学習することで、今後の自治活動の方向性が明確化し、日々の活動に活かすことができている。医学生の自治会活動のナショナルセンターとして、他大学の様子や医学教育・卒後臨床研修などの全国的な動きについての情報提供を行い、大学との懇談に活かしてもらうなど、各地の活動推進をサポートしています。

## 第2章 医学生の切実な要求を実現し、学びがいのある医学部にしよう

ここでは医学生が学生生活を送る中で現在どのような要求があるのかを整理し、その実現に向けて医学連・学生自治会としてどう取り組んでいくかということについて述べます。

### 第1節 新型コロナウイルスの医学生への影響—医学生が安心して学べる場を—

#### ① “With コロナ”の医学教育と、学生がいま感じる困難

2020年3月ごろから日本国内でも新型コロナウイルス感染拡大が起り始め、外出自粛要請に伴い企業でのテレワークへの切り替えや学校での休校措置が行われました。全国の医学部でも次々と対面での講義や実習が中止され、大学構内への立ち入りも制限されました。3年経った現在でも、新型コロナウイルス感染拡大は収束しておらず、依然として対面講義や病院実習が制限される例は尽きません。しかし、そのような状況でもなるべく効果的に医学を学べるようにしようとする試みが生まれ、教職員と医学生とが実践とフィードバックを繰り返す「学び合い」のなかで、“with コロナ”の時代における医学教育の手法が発展してきました。具体的には、解剖学実習に参加する学生をローテーションさせることで密集を回避しつつ、その回の実習に参加できなかった学生の理解度低下を防ぐため、オンデマンドの事前学習、臨床系教員によるオンライン講義、学生間の申し送り<sup>3</sup>を行った事例<sup>4</sup>などが挙げられます。

一方で、学修面でもそれ以外の面でも学生が感じる困難がすべて解消されたわけではありません。学修面では、同級生と勉強する機会やそのための場所(図書館の自習室など)が減っていること、病院実習が制限されている診療科があることなどが挙げられます。また、学修面以外では、課外活動が制限されていること、学園祭などの行事を行うノウハウが継承されなくなっていること、就職活動のための県外移動が制限されることなどが挙げられます。

3 執刀した学生が対面参加できなかった班員に解剖の様子を共有すること

4 江藤 みちる, 大河原 剛, 成田 正明. コロナ禍での三重大学医学科系統解剖実習の実施—2020年度および2021年度の実践報告—. 三重大学高等教育研究.

## ② 医学連の取り組み

2020年(37期)、医学連は、より多くの医学生の実態を客観的に捉え、適切な対策や支援の要請を行うため「医学生の声が届ける！コロナ時代の意識と生活の実態調査」を行いました。時期により状況が変化していることを考慮して複数回の調査とし、第1回<sup>5</sup>は31大学から1082件、第2回<sup>6</sup>は49大学から1374件の回答を得ました。調査項目は、経済状況、学修環境（一般教養・基礎/臨床医学/臨床実習）、就職活動、課外活動、人との繋がり、大学との関係、精神的な状況などコロナの影響について幅広く質問する内容となりました。

この分析結果は、医学連のホームページで公開し、NHKのニュース番組「おはよう日本」や医療系ニュースサイト m3 など報道各社で取り上げられました。その他にも、学会での発表に調査結果が引用されるなど、様々な場面で医学生の声が取り上げられました。

また、第53回医学教育学会でもオンデマンド発表を行いました。ライブディスカッションにも参加し、「①十分な感染対策を行なった上で可能な学修の代替措置とはどのようなものがあるか。また、十分な感染対策を行なった上で臨床実習の実施方法としてどのようなものが望ましいか。」「②学生のメンタルヘルスを考慮した際に、オンライン・オンデマンド形式と対面形式での講義の割合はどのようなものであるべきか。」の2点について教員や研修医、学生などの参加者と議論しました。

医学連では、今後も情勢に応じて不安の声や支援を求める声に耳を傾け、発信を行っていきます。また、コロナ以前から存在する医学教育の問題点についても、改善への道を追求していきます。

## 第2節 学生にとっても地域にとっても良い地域枠とは—管理より支援を—

### ① 地域枠に関する情勢

地域枠は、全国的な問題である医師偏在・医師不足対策を主な目的として各大学・自治体で設定された枠組みです。そのため、地域医療を守るために地域医療に従事することを考えている医学生を後押しする必要があるとされています。しかし、近年別枠方式への一本化<sup>7</sup>やマッチングシステムの改定など、地域枠制度の医師確保対策としての側面の強制力が強くなってきており、「地域医療に従事したいと考える医学生を後押しする制度」からかけ離れていくのでは、との懸念があります。また、地域枠には法的拘束力はありません<sup>8</sup>が、医道審議会の構成員等からは、地域枠で入学した学生に対する道義的責任を問うべきとの意見も挙がっています。しかし、高等教育機関である大学が卒後進路を特定の研修病院にのみ限定することは、職業選択の自由および大学設置基準32条（卒業の要件）から、不相当であるとも考え

5 医学連 HP『医学生の声が届ける！コロナ時代の意識と生活の実態調査<第1回>分析速報』  
<https://www.igakuren.jp/igakuseidata/2020/10/702.html>

6 医学連 HP『医学生の声が届ける！コロナ時代の意識と生活の実態調査<第2回>分析速報』  
<https://www.igakuren.jp/igakuseidata/2021/02/806.html>

7 厚労省と文科省が相談して別枠方式に一本化することが決定した。別枠方式とは、一般の入試と地域枠入試を別にして、地域枠入学生は必ず奨学金を受けるとする方法のこと。

8 地域枠の従事義務要件は、各自治体が貸与した奨学金の返済免除に対する要件と、大学入学選抜の応募要件として課した義務履行条件（卒後進路指定・奨学金需給指定）に分類することができる。前者は各自治体と個人間の民法契約であり、返済によって従事義務は解消される一方で、後者に関しては、指定研修先や年数の不確定から有効条件を満たさないこと、憲法上の職業選択の自由及び居住移転の自由の観点に抵触することから法的拘束力は発生しないと考えられる。ゆえに、奨学金を返済した場合や奨学金を伴わない場合には、従事義務は法的には解消されると考えられる。

られます。さらに、地域枠学生に対して、入学時にかわした契約内容の変更が卒業時に一方的に伝えられたという事例も医学連に寄せられています<sup>9</sup>。

山梨大学の地域枠制度では、令和2年度入学者から（初期研修に加え）専門研修を県内の指定病院で行うこと、修学資金を返還する場合は年10%の金利を支払うことなどが定められています。それに加え、令和3年度以降の入学者には違約金が設定されるという方針が報道<sup>10</sup>によって明らかになりました。また、5年次の地域枠学生を対象に行われる個別面談などで、結婚や妊娠などライフプランの立て方を制限するような発言があり不安に思った、との声も挙がっていたことから、地域枠に関する学生の声を集めて適切に行動するため、学生会がアンケート調査を実施しました。質問項目は修学資金の利用状況、説明会・個別面談での説明は十分か、地域医療の学びに関する要望、違約金についてなどで、107件の回答がありました。特に違約金に関しては、その報道を知らない医学生や、違約金制度の詳細について明らかにされていなかったことから問題意識を持っていない学生も多かったようですが、「違約金を定めるよりも、地域で働くことの魅力を伝えられる教育のほうが必要だ」というような声も複数寄せられました。

## ② 医学連の取り組み

先述の山梨県の対応について、医学連は山梨県福祉保健部医務課に「医学部地域枠に関する公開質問状<sup>11</sup>」を提出し、違約金設定に関する具体的な内容や今後の方針について聞き取りを行いました。医務課からの回答では、違約金を設定する必要性について、今年度初めて地域枠医師の義務年限違反者が2名現れたことを受け、地域医療への貢献を確固たるものとするため、との理由が挙げられました。また、違約金の具体的な金額も明らかにされたほか、結婚や介護などの事情による離脱は認めないとの方針も示されました。さらに、医学連は全国医師ユニオン、日本労働弁護団と勉強会を重ね、今回の制度における問題点を確認しました。その上で、この違約金設定が今後全国に波及することを危惧し、また、この違約金設定や地域枠制度全体における「学生を地域に縛り付ける」方向性を是正するために、2021年11月19日厚生労働省記者クラブにて三者合同での記者会見を行いました。

また、島根県の地域枠学生及びその関係者から島根大学医学部の地域枠の運用方法について不安の声が医学連に寄せられ、2022年2月に島根大学と島根県に対して「島根大学医学部地域枠に関する公開質問状」を提出しました。

医学連は「地域枠・地域の医師確保に関する全国調査(2021年度版)<sup>12</sup>」と題して、将来の労働環境に求めるものや地域枠制度・地域の医師確保についてアンケート調査を行いました(回答期間 2021年12月4日~2022年4月1日)。回答は、紙媒体とインターネットで収集し、61医学部の学生から計2270件の回答が得られました。調査項目は、下記のとおりです。

- 地域枠制度、及び地域医療に対する医学生の認識
- 現時点で想定しているキャリアプランや人生設計

<sup>9</sup> 宮崎大学では、入学時に契約した内容と異なる従事義務内容を入学後に提示される事例がありました。大学側からは、学生がキャリアを積む上で不利益がないように努めているという意向は伝えられましたが、契約内容が変わる上で学生への説明が不十分だったことや、6年生のマッチング期間には何も説明がなかったことなどから、学生の間には不安が広がっていました。この件に関する学生会のアンケートを元に大学側と懇談を行い、その後は説明会が開催され、法的拘束力がないことの説明がなされるといった成果につながりました。

<sup>10</sup> 山梨日日新聞『医学部地域枠に違約金』(2020年11月5日)

<sup>11</sup> 医学連 HP『医学部地域枠に関する公開質問状を山梨県に提出し、回答をいただきました』  
<https://www.igakuren.jp/topics/%e6%b4%bb%e5%8b%95%e5%a0%b1%e5%91%8a/750.html>

<sup>12</sup> 医学連 HP『2021年度医学連アンケートの報告書を掲載しました!』  
<https://www.igakuren.jp/topics/%E6%B4%BB%E5%8B%95%E5%A0%B1%E5%91%8A/1033.html>

- 地域枠制度の利用を検討した際の詳細について
- 地域枠の学生への特別カリキュラムや学修支援
- 地域枠学生の属性
- 地域枠制度での入学を経た現状への満足度

全国調査の報告書では結語として、「対話の中で作り上げる地域枠へ」という言葉を掲げています。医学連は今後も、地域枠の制度設計に関する議論に医学生・医師を含むより多くの人が関わっていく場が必要だという認識が社会全体に浸透するよう、自ら積極的に対話に参加し情報の発信を行っていきます。

### 第3節 学費値上げ、新修学支援制度に関する活動—学生が平等に学べる場を作ろう—

#### ① 大学等修学支援法の改正

大学等修学支援法<sup>13</sup>が2019年5月に改正され、2020年度から施行されました。制度内容の変更により、これまでは支援を受けることができていた所得層の家庭の学生が支援を受けられなくなります。さらに、医学部学生で多いと言われる多浪生、留年生、再受験生、編入生が不利益を被る内容でした。また、昨年からの国立大学の学費値上げの動きも続いており、東工大、東京藝術大、千葉大、一橋大、東京医科歯科大が授業料の値上げを表明したことを踏まえて、文科省は授業料自由化の議論を始めています。医学連としては、そもそも現在の高等教育の学費は海外に比べても高く、学生の学びたい要求を実現するためには学費の引き下げが必要であると考えており、このような学費値上げの動きが今後広がっていくことを懸念しています。

2019年には、高等教育無償化プロジェクトFREEが行ったアンケート「学費・奨学金に関する実態調査」に協力しました。このアンケートは学生の学費・奨学金に関する実態を可視化するために行われ、FREEとして集めた回答の合計は8798枚で、そのうち医学連としては医学生から816枚を集めました。アンケートからは「生活費のためにアルバイトしてた友達が留年して、留年すると奨学金が止まるので、学費をさらに稼ぐためにアルバイトを過重にし、勉強ができなくなり、もう一度留年してしまった友達がいます。」「私立医学部に受かったものの、学費が払えず、退学。夢を諦めて国公立の工学部に編入した。」という切実な声が聞かれました。

このような医学生の経済的状況を改善するために、医学連では2019年11月27日に緊急声明<sup>14</sup>を発表し、12月22日には記者会見を行いました。この会見には医学連役員のほかに各地の大学で学費の値下げに対して活動していた学生にも参加してもらい、メディアを通じて社会に発信しました。

東京女子医科大学が2021年度以降の入学生について、6年間の学費を計1200万円以上値上げすることが報じられました。コロナ禍による大学病院の経営悪化の影響などが指摘されていますが、今回の値上げにより東京女子医大は全国の私立医大で2番目に学費の高い大学となります。この値上げに対して他大学の追従が懸念されており、今後の他大学の動向についても注意深く追っていく必要があります。

13 『大学等における修学の支援に関する法律施行規則の一部を改正する省令等の公布について（令和2年3月6日総合教育政策局長・初等中等教育局長・高等教育局長通知）』[https://www.mext.go.jp/content/20200306-mxt\\_gakushi01-000005496\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200306-mxt_gakushi01-000005496_01.pdf)

14 医学連 HP 『【緊急声明】新修学支援制度と学費値上げに関する緊急声明を発表』<https://www.igakuren.jp/topics/info/338.html>

## ② 継続して学費値下げ・給付型奨学金制度の充実を求めよう

新型コロナウイルス感染拡大により、学生の経済状況にも様々な影響がありました。家計全体の減収により仕送り額が減った学生や、アルバイト先が休業・廃業したことに伴って収入を得られなくなった学生が多くみられ、特に医学部では臨床実習などの兼ね合いから、飲食店等でのアルバイトを禁止する大学も出てきました。また、対面での講義がライブ授業やオンデマンド等に切り替わったことで、自宅のオンライン環境を整える必要に迫られ、通信機器を新たに購入しなければならず出費が増えるなど負担の増加もみられました。実際にコロナの影響により休学せざるを得なくなり、多額の学費負担に苦しむ声も医学連に届いています。

現在、奨学金利用は学生の2人に1人<sup>15</sup>とされています。一方、世界では高等教育無償化への大きな流れがあります。日本でも免除枠や給付型奨学金の拡充が少しずつ進んできていますが、免除枠や給付型はごく一部の成績優秀な学生に限定されており、これでは施策としては不十分といえます。コロナ禍であるかどうかに関わらず、学生にはまだまだ経済的な不安が付きまとう状況であるということです。

医学連は今後も、学生負担軽減、大学予算の拡充の要求を集め、安心して医学を学べる環境づくりを整備します。そして、大学を臨床医学に限らず研究にも安心して取り組めるような場にしていきます。

## 第4節 医学部入試不正問題—医学部における差別、ハラスメントを絶対に無くそう—

2018年8月7日、東京医科大学の内部調査委員会は、2006年から医学部医学科の一般入試で女性受験者の得点を一律に減点していたことを明らかにしました。2022年9月、東京地方裁判所は「性別というみずからの努力や意思では変えられないことを理由として、女性の受験生を一律に不利益に扱った。不合理な差別を禁止した憲法14条の趣旨に反する」と指摘し、東京医科大学に合わせて1800万円余りを支払うよう命じました<sup>16</sup>。文科省の調査によれば、他にも複数の大学で入試の公正性を損ねるような取り扱いがあったことがわかっています<sup>17</sup>。

医学連では、この一連の問題に関しての医学生の率直な考えや、性別や年齢に係る不適切な面接、大学内での差別意識、背景にある労働環境に対しての考えを明らかにするべく、2018年12月から3月末にかけて全国の医学生を対象にアンケート調査を行いました。全国58大学の医学部から3017枚の回答が集まり、これをもとにアンケートの最終報告と提言<sup>18</sup>を作成しました。

このアンケートでは、医学部入試の際、性別や年齢に特化した質問を受けている学生がいることが明らかになりました。ライブイベントに関わる質問をされた学生は全体の14%で、年齢に特化した質問をされた学生は全体の5%、再受験生では25%でした。「入学後に性別や年齢等を理由に嫌な思いをした経験があれば教えてください」という自由記述の質問に対しては、約200件の回答が寄せられました。「医局説明会で『女医は結婚すれば働かなくていいから楽だよね』と何度も言われた(女性・6年)」といった発言や、「解剖実習で、嫌がる女子の手を無理やり掴み、ご献体の陰茎を触らせようとした(女性・3年)」と、男子学生からのセクハラを受けている実態も明らかになりました。このことから、医療界の

15 日本学生支援機構の学生生活調査によると、2016年で48.9%の大学生が奨学金を受給している。

16 27人について1人当たり20万円から150万円の慰謝料を認めたこの判決に対して、原告の1人は「女性差別という不当な扱いに対して適正ではないと思う」と話しています。

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220909/k10013811481000.html>

17 文科省「医学部医学科の入学者選抜における公正確保等に係る緊急調査最終まとめ」平成30年

18 医学連HP『【全国調査結果の最終報告と提言】入試不正に関する医学生アンケート』

<https://www.igakuren.jp/topics/info/195.html>

みならず医学を学ぶ場である大学においても、そして医学生の中にも年齢や性別による差別意識が根強く存在することが分かります。

また、医学部の中には実習や研究室のかかわりの中でいまだにアカハラ・パワハラが根強く残っているという声も寄せられています。2022年の文科省交渉では、各大学に対して開かれた相談窓口を設置するなど適切な対処を促すよう求めました。これに対して文科省は、アカハラ・パワハラは当然あってはならないものとの認識を示したうえで、各大学の教務担当者の会議でハラスメント対策を呼び掛けていることを報告し、ハラスメントは今後も取り組んで行くべき課題だということを表明しました。

医学連では、今後も寄せられた声をもとに継続して要請や発信を行い、大学や医療界における差別意識やハラスメントを一掃するよう働きかけていきます。

## 第5節 医学生が抱える不安と医学教育への参画—より良い医学教育の実現のために—

### ① 医学生が抱える学業への不安

「カリキュラムが過密でゆとりがなく大変」「急なカリキュラムの変更で混乱を招いている」など、医学教育改革に伴うカリキュラムの過密化により、多くの医学生が学業への不安を抱えています。医学連ではこれらの声を受け、医学教育改革において学生が置き去りにされているのではないかと懸念から、2017年11月から2018年3月にかけて「医学生が抱える学業への不安の実態調査」を行いました。調査の結果、約6割の学生が学業に不安を感じており、カリキュラムが過密で余裕がないと感じている学生は約7割に上ることが明らかになりました。また、カリキュラムが過密であると感じている学生の方が、そうでない学生に比べて学業についての不安を感じている割合が高いという結果になりました。さらに、特に合否判定や獲得目標の不明確さ、教育の手法・教員のサポートについて不満をもつ学生の方が、そうでない学生に比べて不安を感じているということもわかりました。したがって、これらの原因を取り除くことで不安を感じる学生は減少するのではないかと考えられます。

この調査後も、「厳しい進級判定が不安」「成績判定基準が不明確」など、医学教育改善を求める声は医学連に届いています。安心して医学を学べる医学部にするために、医学連と各地の自治会が力をあわせて学生の声が届ける場を保障し、医学教育の改善に取り組んでいきましょう。

### ② 学生が医学教育に参画し、より良い医師になるために魅力的な医学部を主体的に作ろう

現在、日本国内の全ての医学部では、2024年までにアメリカのECFMGによる国際認証を受けるため、WFME（世界医学教育連盟）が定めたグローバルスタンダードを満たさなければならないということで大幅なカリキュラム改革がなされています。多くの大学でこの認証評価も始まっていますが、医学連はその評価項目の中でも特に「学生の医学教育への参画」に取り組んでいます。

前述の実態調査の分析を踏まえ、医学連では2018年11月～2019年6月にかけて、全国9つの医学部において学生と教員による医学教育ワークショップを実施し、その前後で双方にアンケートを行いました。事前アンケートでは、学生は教員に対し「相談したい」「理解してほしい」という気持ちを持ちつつも、実現できていないということが明らかになりました。教員側も学生の意見を尊重したいと回答した一方で、必ずしも学生の意見を反映できているとは感じていないことがわかりました。ワークショップを行った後のアンケートでは、学生が「困ったときに教員に相談したい」と回答する割合が増え、対話を通してより教員に相談しようと思えるようになったという結果が出ました。教員側も、学生の意見を尊重したいかどうかについて「とても思う」と回答する割合が上昇しました。参加した学生・教員のほとんどが「ワークショップを通して教員と学生の相互理解が深まった」と回答し、「相互理解によって医学教

育がよりよいものになると思う」と回答する割合も増えるなど、医学教育改善に向けた期待や参画へのモチベーションが高まるという結果が得られました。また、今後の課題としてより多くの人に参加してもらうこと、一度の対話で解決が難しい問題については継続して話し合っていくことなども見えてきました。この結果は、2019年の医学教育学会でも口頭演題として発表しています。

今期(39期)の医学連の取り組みとしては、全国調査「医学部カリキュラムについてのアンケート」の実施(2022年12月～2023年3月)が挙げられます。アンケート作成に先立って日本医学教育評価機構(JACME)の奈良信雄氏からお話を伺い、事前学習を行いました。調査項目は以下の通りです。

- ① 現行カリキュラムに対する満足度について
- ② 現行カリキュラムが健康な生活に及ぼす影響について
- ③ カリキュラム作成への参加について
- ④ 医学部カリキュラムについてのアンケート

調査結果については、40大会後に報告書を公開する予定です。

### 第6節 医師の過重労働—医療者自身の命と国民の健康を守るために—

医療現場では、以前から過酷な労働環境の中で医療者の命が危険にさらされてきました。医師の過重労働を引き起こしている原因として医師の労働者としての権利が守られていない現状があります。このような医師の労働環境では、患者さん、国民のために最善の医療を行うことはできません。

2019年3月、医師の働き方改革に関する検討会において、2024年度から医師に適用する残業時間規制の内容が明らかにされました。具体的には、「医師の時間外労働上限」を適用し、原則として年間960時間以下とすること、ただし、「3次救急病院」や「年間に救急車1000台以上を受け入れる2次救急病院」など地域医療確保に欠かせない機能を持つ医療機関で、



労働時間短縮等に限界がある場合には、期限付きで医師の時間外労働を年間1860時間以下までとすること、研修医など短期間で集中的に症例経験を積む必要がある場合には、時間外労働を年間1860時間以下までとすること、2024年4月までは5年間、全医療機関で「労務管理の徹底」「労働時間の短縮」を進めることなどが示されました。この方針では、脳・心臓疾患の労災認定基準における時間外労働の水準である80時間/月を大きく超えています。また、2019年度に医学連が全国の医学生を対象に行ったアンケート調査では、2千人以上の回答があり、そのうち68.7%が将来の自身の働き方について不安を感じています。現行案では、医師の健康が大きく損なわれてしまうリスクが大きく、将来医師になる私たち医学生としても看過することはできません。医師の健康が担保されなければ、国民に対して安全で質の高い医療を提供することも保障できず、医師のみならず患者さんの健康を守ることもままなりません。地域医療も一部の医師個人の努力に依存するような体制では、崩壊する危険性があるのではないかと懸念します。

## 第7節 学生の一致する要求を伝える活動—医学教育や施設を充実させよう—

多くの学生から、図書館の充実や自習室の設置など、学習・生活環境の向上を求める声があがっています。また、全国の医学部で大量留年が問題視されていますが、留年したあとのフォローアップは十分とは言えない状況にあります。

大学施設や医学教育上の問題は、「学生生活の主体者である学生の要求を伝える」という自治活動の働きによって、大学にも認識され、改善につながっています。これまでなかなか改善されず、変えることは不可能だと思われていたような問題でも、実際には教員側が問題に気づいていない場合や、予算がないなどの理由から長年にわたって放置されているという場合もあります。このような問題については、自治会が学生の代表として懇談の場で意見を伝え、双方の事情をすり合わせてお互いにアイデアを出し合うことで、上記のように解決に向かう場合も少なくありません。自治会として、こうした学生の困りごとを愚痴で終わらせることなく、学生の一致する要求としてまとめることで、改善につなげていきましょう。

## 第8節 全国医学生ゼミナールの成功へ—学生の学びたいという要求の実現を—

### ① 全国医学生ゼミナールの成功のために

全国医学生ゼミナール（以下、医ゼミ）は多くの医学生の「より良い医師になりたい、そのために自主的に学びたい」という思いからスタートしました。

「より良い医師になりたい」「自分の興味あることを自由に学びたい」という医学生の要求を実現することも、学生自治会の大切な役割です。そのため、学生自治会の連合体である医学連は、医ゼミを主催し、その開催に責任を持っています。

近年の医ゼミには、全国の医学生だけでなく、看護学生、薬学生など幅広い専攻の医療系学生や教育系や理工系など様々な分野を専攻する学生が集まります。自らテーマを設定して学び、仲間と意見を交わし合うことは、より良い医療・社会を作り上げていく原動力になります。全国のさまざまな大学・学部の学生との交流を通じて、「視野が広がる」「全国に信頼しあえる仲間ができる」「主体的になり、仲間とともに成長できる」などの声が毎年聞かれます。

### ② 自主ゼミナール活動と自治会を共に発展させよう

医ゼミは単なるサークル活動ではなく、医学生全体の「学びたい」という要求や、開催大学における「自大学で学び交流する場を作りたい」という思いを集約した学術交流企画です。各大学の学生自治会が主管を担う場合でも、全国各地の医ゼミに参加する会が主管を担う場合でも、その地域のより多くの学生の要求に応えられる場として医ゼミを開催する努力が必要です。

過去には、医ゼミを開くことで自治会が発展してきた歴史のある大学も存在します。宮崎大学では60宮崎医ゼミの主管運動において、宮崎大学学生会のメンバーと医学連が「なぜ自治会が医ゼミの主管を行うのか」について深く議論してきたという過程があります。さらに医ゼミ開催後、宮崎の現地実行委員会や自治会交流集会 in 宮崎に参加した学生が中心となって学生会に合流し、医ゼミの前後で学生会執行委員が8人から25人に増えました。それにより活動の幅が広がり、1年後には学生大会を開くまでに至りました。

### ③ 対面開催を目指した65和歌山医ゼミでの困難と成果

2022年8月15日から17日の3日間にわたり、第65回全国医学生ゼミナール in 和歌山が、オンラインで開催されました。3日間で学生・専門学校生146名、大学院生4名、一般104名、高校生3名、全体で257名の参加がありました。

現地実行委員会を担った和歌山医ゼミに参加する会「みかんの会」には、和歌山県立医科大学の学生を中心に、東京医療保健大学、和歌山市医師会看護専門学校、徳島大学の学生が所属しています。みかんの会は設立から2年と日が浅く、低学年が中心の団体ですが、前年度の信州医ゼミで医ゼミをつくり上げる楽しさを経験することができたメンバーは、「和歌山で医ゼミを開催したい」という熱意を高めていきました。

和歌山県立医科大学では、医学部学生自治会が規約に基づいて活動しています。みかんの会は自治会の協力のもと、2021年12月に全校生徒に向けて医ゼミ開催の是非を問うアンケートを行い、約400件の回答のうち、9割以上の賛成を得ることができました。医ゼミ参加者やみかんの会の多くの学生の「学びたい」「交流したい」という思いや、広く大学内の要求実現に取り組む自治会との思いが呼応する中で、第65回和歌山医ゼミの開催に至りました。

現地開催に向けては、現地実行委員会が中心となり和歌山城ホールやホテルを予約するなど準備を重ねてきました。しかし、多くの都道府県で過去最多の陽性者数を記録している現状を鑑み、オンライン開催を決定しました。

メイン企画では、「すべての子どもが、好きな『私』になれる社会へ」をテーマとしました。メインレポート・学生発表では、発達・権利・家庭という3つの面から子どもとはどのような存在なのかを考えた上で、必ずしもすべての子どもが好きな『私』になっていない状況について考察しました。また、児童心理カウンセラーの石田志芳氏による講演では、自身が受けた虐待経験をもとに、参加した学生が大人として、医療者としてどのように子どもと向き合っていくてほしいかお話いただきました。参加した学生からは、「誰かのちょっとした言動がその子の居場所を奪ってしまったり存在意義を否定してしまったりすることがあるのだろうと思うが、そうしたことが起こらないためにまず意識しなければならないのが『存在を受け入れてあげること』なのではないかと感じた。」などの感想が寄せられました。

平和企画では、「ロシアによるウクライナ侵攻 いま、平和を求める勇気を」をテーマとしました。平和レポート・学生発表では、ウクライナ侵攻の背景を整理した上で、戦争が人々や社会に及ぼす影響について考察しました。そして、次の戦争を起こさないために何ができるか全国準備委員会での議論も踏まえて論じました。国境なき医師団 日本事務局長の村田慎二郎氏による講演「紛争地からの伝言」では、シリアや南スーダン、イエメンなどでの経験を聴き、参加者は紛争地の悲惨さや人道援助の難しさについて話し合いました。

### ④ 第66回大阪医ゼミを成功させよう

今年で66回目を迎える医ゼミは、歴史と伝統を脈々と受け継ぎ発展を続けてきました。現在でも学生の手だけで運営している学術文化企画としては国内で最大規模のものです。医学連では医学生の学ぶ要求を実現するために、医ゼミの開催に責任を持つ立場として「自主ゼミナール」の場を提供しています。

今年は、大阪公立大学（以下、大阪公大）および関西医科大学（以下、関西医大）が共同で主管校を担うことが決定しました。大阪医ゼミに参加する会「KONAMONs」には、主に大阪公大・関西医大・近畿大学の学生が参加しています。65和歌山ゼミには3人のメンバーが参加し、分科会発表やレポート執筆

などに精力的に関わりました。また、その後の準備委員会には他のメンバーも参加するなど、盛り上がりを見せています。

社会の変遷とともにその時々合った形に変化しながら、思想や信条の違いを超えて多くの学生の思いが詰まった企画として発展してきたのがこれまでの医ゼミです。大阪での開催は今回が初めてであり、今回の大阪医ゼミを通して更に全国に学びの輪が広がり、医療系学生の学びの場としてこれからも医ゼミが受け継がれていくよう全国実行委員会としても全力を尽くしていきます。

## 第9節 平和と民主主義を擁護する一核なき世界の実現に向けて一

### ① 危機的な世界情勢と核廃絶に向けた運動の高まり

ロシア政府は2022年2月24日、ウクライナの東部地域にロシア軍を侵入させ、ウクライナ各地の軍事施設やキーウ、オデーサなどへの攻撃を開始しました。戦火は今なお広がり続け、多数の死傷者が生じています。さらに、核戦争の危険性も高まっています。プーチン大統領は2023年2月21日に、米口間に唯一残る軍備管理・軍縮条約である「新戦略兵器削減条約（新START）」の履行停止を表明し、23日には陸・海・空軍の核戦力を増強していくと宣言しました。

ウクライナ侵攻以来、欧州や北東アジアを含む各地でも核抑止依存が一層高まっており、軍備拡張も加速しています。長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）は、「利害が異なる諸国間の分断と対立が深まり、まさに『安全保障のジレンマ』と呼ぶべき事態が進行している<sup>19</sup>」と警鐘を鳴らしています。

そうした中、核廃絶を目指す世界的な運動も高まりをみせています。2022年6月には核兵器禁止条約第1回締約国会議で「ウィーン宣言」が採択されました。また、8月にはニューヨークの国連本部で第10回核不拡散条約（NPT）再検討会議が開かれました。

### ② 医学生としてどう行動するか—IPPNW 世界大会への参加を例に一

戦争や核の使用により命が奪われることを防ぐために、医学生として何ができるでしょうか<sup>20</sup>。一例として、医学連中央執行委員会は、2023年4月に行われる核戦争防止国際医師会議（IPPNW<sup>21</sup>）への役員派遣を決定しました。IPPNWは、1980年に米国とロシアの医師によって設立された核兵器廃絶を目的とする唯一の国際的な医学団体です。60カ国以上の医療団体から成る超党派連合体で、多数の医師、医学生、その他の医療従事者、そして問題意識を持つ市民を代表しています。その共通の目標は、核による滅亡や兵器による暴力の脅威にさらされずに済む、より平和で安全な世界を創ることです<sup>22</sup>。

今回の IPPNW 世界大会では、気候危機と核兵器がもたらす健康への影響に焦点が当てられます。医学連役員が参加することで、医学連規約が目標として掲げている、「国際交流をはかる」こと、そして「平和と民主主義を擁護する」ことが実現されるよう期待します。

19 「ウクライナ侵攻から一年を迎えて 長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）見解」 2023年2月24日  
<https://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/topics/42688>

20 第65回和歌山医ゼミの平和レポートは、戦争による死を防ぐために5つの行動を提唱しています：(1)正しい情報入手すること、(2)正しい背景を知ること、(3)金銭的支援や物品支援をすること、(4)平和・戦争に関する作品などに触れたり、何もない日常を大切にしたりすること、(5)ウクライナ難民を受け入れること

21 International Physicians for the Prevention of Nuclear War

22 <https://www.ippnw.org/about>

## 第3章 自治会活動、医学連の活動の発展のために

ここまで、学生自治会や医学連の魅力・意義と、現在医学生が抱えている要求、その実現のための取り組みを確認してきました。この章ではそれらを受けて、学生自治会や医学連の活動を発展させていくための実践や、今後の展望について述べていきます。

### 第1節 自治会活動の発展に向けて

自治会活動を活発にしてこそ、要求実現の推進力が強まり、私たちの願いが実現することにつながります。自治会活動を発展させていくための取り組みは、毎年継続している活動を絶やさず行っていくことと、学生の願いに基づいた新しい活動に取り組むことの2つの側面で考えることができます。

#### ① アンケートなどで声を集める活動が学生自治の出発点になる

大学側に要望を伝えるだけでなく、それに対する回答や成果についてフィードバックを行うことで、「自分も自治や医学教育に参画しているんだ」と気づいてもらうことが重要です。弘前大学医学部学生自治会では「M.I.C.<sup>23</sup>広報」を定期的に発行し、アンケートの結果や教授懇談で伝えた内容とそれに対する回答などを掲載しています。ほかにも宮崎大学学生会では学生会新聞「ひぼまえ」を、信州大学学生会では「学生会のおたより」を定期的に発行し、活動を学内に広める活動を積極的に行っています。自治会が学生の要求実現に向けて取り組んでいる組織だと認知されることで、より意見が集まりやすくなり、学生の総意を大学側に伝えることができる、というように、正の循環が生まれていくのです。

#### ② 自治会活動のやりがい、悩みを交流しよう

各大学の自治会が毎年行っている活動は、他大学の学生自治会と交流することで、自大学の中では気づけないその重要性に気づくことができます。また、医学連役員との交流の中で、全国的な課題の解決へとつながることもあります。

### ▼自治会懇談～各大学の課題を全国へ～

医学連は、各大学の自治会・代表者組織との懇談を定期的に行っています。各大学で困っていることを相談したり、他大学で行っていることを共有して参考にしてもらったり、医学連の取り組みを紹介して交流を深める機会としています。また、医学連役員も含め自治会のメンバー同士がそれぞれの活動から学び合う場にもなり、複数自治会合同懇談なども呼びかけています。自治会だけでなく、「自治会を作りたい!」という学生・大学にも積極的に赴き、ノウハウなどの支援を行っています。

今期(39期)は、コロナの状況も見つつ、対面・オンラインを組み合わせ懇談を実施しました。東北大学、群馬大学、国際医療福祉大学、岐阜大学、浜松医科大学、京都府立医科大学、神戸大学、和歌山県立医科大学、島根大学、岡山大学、高知大学、福岡大学、宮崎大学の13大学と懇談を行うことができました。ここでは、京都府立医科大学との懇談の様子を報告します。

京都府立医科大学は、自治会再建に向けて日々順調に活動しています。新たに作成した自治会規約は既に医学部で承認されており、現在は全学での承認を待っているところです。学年進級制<sup>24</sup>や自習室の少なさなどの課題もありますが、これらの課題や学生の要望に対する大学側の対応も良く、大学との連携も良好です。医学連加盟に対して非常に前向きであり、今後も加盟に向けて一緒に取り組んでいく予定です。

23 M.I.C.とは Medical Information Committee の略で弘前大学医学部学生自治会の通称

24 留年するともう一度その学年で取得した単位を取り直す制度

今後も、交流が途絶えることのないよう、懇談や日頃の連絡を継続していきます。

### ▼自治会交流集会～各地の自治会活動の力に～

医学連は、自治会交流集会を年に数回開き全国の自治会の情報共有や交流の場を作っています。自治会同士がお互いの活動を報告しあうことで「自分の大学でもやってみよう」と自分たちの自治活動のモチベーションがあがったり、お互いの活動の悩みを相談することで「自分たちと同じ悩みを持っている自治会と話せて安心した」「ほかの大学での成功体験を聞いて解決していく糸口が見つけた」と、自分たちの活動と他大学の活動を照らし合わせて情報共有できたりします。

今期は2022年11月19日、20日に神戸市男女共同参画センター（あすてっぶ KOBE）で「自治会交流集会 in 神戸」を開催しました。全国から対面会場に21人、オンライン会場に11人、計32名が参加しました。集会では、自治会取り組み紹介、医学連からの発表、渡部昭男氏(大阪成蹊大学特別招聘教授)による講演、ワールドカフェ、SGD、交流会等を行いました。

自治会取り組み紹介では全国各地で自治活動をしている団体(弘前大学、近畿大学、神戸大学、高知大学)の代表者が、各地の活動内容を発表しました。それぞれの大学内で、自習室や留学、授業のコース選択など、特色ある取り組みによって学生生活が改善されていることがわかりました。

また、一定時間ごとにテーブルを変えてチームで新しいアイデアや解決策を考える「ワールドカフェ」を行いました。今回のお題は「自治会の悩み“あるある”」とし、認知度向上のための広報、執行部メンバーの集め方、企画の作り方、会費の使用法など様々な話題が出ました。

講演会では、「漸進的無償化公約の10年—高等教育の無償化をめざして」と題して渡部昭男のこれまでの活動と、国際法・人権などに関わる知識や理念について解説していただきました。学費無償化の可能性を聞いた参加者からは、「授業料だけではなく、教科書代や生活費の補助も必要。学生の負担を減らすためにさまざまな方法があることがわかった。」などの感想が寄せられました。

## 第2節 サークル活動、学園祭、学習会、新歓など学生の自主的活動を活発に

### ① サークル活動の発展、新歓、学園祭や医学展の成功を

サークル活動や学園祭など、学生の自主的活動が活発に行える環境を整えることも自治活動の重要な課題です。このような活動は、学生同士が結びつき人間関係を築いていくことにもつながります。また、将来医師になったときに大切な社会性や主体性を身につけることもできます。学生自治会がサークル予算を決定したり、学園祭の運営に関わったりしている大学も多くあります。

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、昨年度の新歓の時期では大規模な勧誘活動が行えなかったり、学園祭もほとんどの大学で中止されたりと、学生による自主的活動が著しく制限されました。このような活動が行えないことで、学生同士のつながりは希薄になり、今後の活動の継続が難しくなる可能性もあります。特に新入生に関しては、対面授業の制限や新歓・学園祭の中止といったことが、同学年や上級生とのつながりを得る機会の損失に繋がり、これからの大学生活を続けていく上での心理的障害ともなり得ます。このような昨年度の状況を受けて、今年度は開催形式の見直しや感染対策についての議論・準備を行った上で新歓などを行った大学もあります。学生からの求めに応じて、これらの活動方針を決めるため先頭に立って話を進めることも、自治会としてできることの一つではないでしょうか。

## ② 新入生歓迎の取り組みの成功を

新入生歓迎の取り組みは、期待と不安をもって大学に入学してくる新入生に対して学生生活のスタートをサポートするものであり、人間関係作りの基盤にもなります。また上級生にとっても、新入生を迎えて人員確保をするという意味合いはもちろんのこと、自分たちの成長においても良い刺激となるものです。

弘前大学では毎年4月に部活動やサークル、課外活動団体が医学科生に向けて活動紹介を行う「大勧誘会」が行われます。弘前大学医学部学生自治会 M.I.C も大勧誘会に参加し、説明を行なっています。また、令和4年度入学生から学年で最低3人を M.I.C に選出するよう伝えたとこ、4名の学生が M.I.C に加入してくれました。M.I.C の会長は、「今後も新歓を継続し M.I.C が活性化するよう取り組んでいきたい。」と話しています。

新入生には学生自治会への参加を呼びかける働きかけも大切です。学生自治会の役割や成果などをわかりやすく伝えクラス委員などの役員の確立を図りましょう。新入生を迎え入れることは学生自治会の発展や存続のためにとっても重要なことです。各大学の新歓の取り組みを交流し、全国的に活動を盛り上げていきましょう。

医学連は毎年「医学連新聞」新歓特別号を発行しており、新入生に自治の重要性や魅力を伝える内容となっています。新入生を自治会活動へ迎えるためにぜひ役立ててください。

## 第3節 自治会の建設・医学連加盟を進め、多くの医学生の要求を実現しよう

### ① 新しい自治会の立ち上げ、民主的で継続的な活動、自治の必要性が全国に広がっている

この1年間で、新しく自治会を立ち上げようとする動き、民主的な運営を目指して活動を広げている大学が出てきています。

神戸大学では、もともと学生自治会が存在しており、活動をあまり十分に行えていませんでしたが、コロナ禍での学生の困りごとを解決したいという考えから、これまでの学生自治会の形を引き継ぎつつ、学生の願いを実現する組織として活動を一新しました。学生自治会内に6つの部門を立て、それぞれの部門で活発に活動してきました。部門での活動として、大学へ自習スペースの開放を求め、海外派遣・渡航基準見直しの嘆願を行うなど、学生の要望に応えました。また、自治会費の収支を明らかにし、使われていなかった自治会費を学生に還元するシステム構築し財政を立て直しました。11月には神戸大学で自治会交流集会对面とオンライン併用で開催し、2年ぶりに対面で交流することができました。その直後の8中執で医学連加盟について話し合い、神戸大学の状況を鑑みるとじっくり体制を整えてから取り組むべきであると判断し、今後も連絡を取り合う関係を続けていくことになりました。

国際医療福祉大学は医学科新設から今年で6年目となります。その学生自治会である「学生会」は医学科に加え6つの学科と合同で構成されています。特色あるカリキュラムの一方で、新設校ならではの施設面の課題や引き継ぎの難しさを抱えていますが、医学連と交流を継続してきた中で様々な大学の自治活動を参考にして取り組みを加速させてきています。特に今年度は医学科の学生のみで構成された自治会の「学生委員会」が発足しました。学生委員会では、学生が少人数で集まって使える SGD ルームの利用に関して制度づくりを行い、より柔軟な利用環境の整備に取り組みました。新たに発足したため運営体制はまだ不安定なものの、医学科生のための活動を進めています。また、加盟についても前向きに検討や準備を進めていくことを確認しています。これから課題の洗い出しを行いつつ、学内でも加盟することについて話し合いを行い、その機運を高めていくことが考えられます。学生委員会の規約の制定や財政基盤の確保など、今後も継続して機能的な自治会の体制構築を図っていくことが目標です。

## ② 実際に加盟に向けて取り組もう

37 大会での近畿大学の加盟、それに続く 39 大会での岡山大学の加盟は、医学連がより多くの医学生の声に応えられる組織として成長できる展望を示すとともに、これから加盟したいと考える大学の学生たちを勇気づけるものでもあります。医学連は、「全医学生の利益を守ること」を理念として掲げており、これまでも、自治会が加盟している・いないに関わらず、全ての大学とのつながりを模索し、要求を集めようとしてきました。そして、ここ最近、学生自治の必要性の再認知と自治活動の活発化が全国で見られています。医学生の声を集め、届ける全国で唯一のナショナルセンターとしての役割を、医学連が発揮していく大きなチャンスです。

この役割を担う医学連を、さらに大きく幅広い存在にしていくことが、運動を発展させること、ひいては要求実現へと結びつきます。医学連を大きくする方法の一つが、各地で活動している医学生・自治会組織の「加盟」です。また、加盟することは全国的な発展があるだけでなく、各大学の活動を元気づけるものともなります。一人ひとりの学生のちょっとした「困った」「変えてほしい」という要求を丁寧な解決していく草の根の活動は、「加盟」を経て守り、より充実させることができます。このように、全国の運動と各大学での取り組み一つ一つは、相互作用を生み出して発展していくのです。

今後も一人ひとりの学生、未加盟校にも自治活動を広げ発展させ、さらなる加盟に向けて呼びかけていきましょう。

## おわりに

学生自治会・医学連では、「自分の大学をより良くしたい」「より良い環境で学びたい」「自分たちの受ける医学教育・卒後研修や労働環境について考えたい」といった医学生の要求を実現することを目指して様々な活動を行っています。それらの医学生の要求を実現することは、「より良い医師になってほしい」「安心してより良い医療を受けたい」という国民・患者さんの願いにも結びついてきます。こうした国民・患者さんの求める「より良い医師」を目指すためにも、一人ひとりが力を合わせ、少しずつ要求実現を進めながら学びがいのある医学部をつくっていきましょう。

新型コロナウイルス感染拡大の影響は 2023 年現在も続いており、様々な面において学生の活動が制限されています。このような状況の中で、学修機会の保障と感染対策の両立は重要であり、また、サークル活動などの学生の自主的な活動も学生生活を送る選択肢としてあるべきものです。これらを継続させ、充実したものにしていくためには、大学の教員と職員、学生が一丸となり、医学教育・大学づくりに取り組んでいく必要があります。その際に学生自治会は学生の声が届けるための重要な役割を担っています。また、よりよい学生生活を求める学生の活動は連鎖的に全国へと広がり、最終的には医療界全体にも良い影響をもたらすでしょう。学生がより多くの悩みを抱える状況であるからこそ、全国の仲間と力を合わせて各地の自治活動を盛り上げ、よりよい学生生活の実現のために一緒に取り組んでいきましょう。

### 付録：各大学の取り組み索引(五十音順)

[京都府立医科大学, 15](#)

[群馬大学, 2](#)

[神戸大学, 17](#)

[国際医療福祉大学, 17](#)

[島根大学, 2](#)

[弘前大学, 17](#)

## 全体討論

役員 山梨大学：山梨大学の代議員から提出していただいた意見集約用紙に対して、39期中央執行委員会を代表して回答させていただきます。「学生のみんなはカリキュラムを変えることができることを知りません。医学生が1年に1度文部科学省とカリキュラムを検討する機会を持っていることも。皆に周知する必要がありますと思います。」以上のご意見をいただき、ありがとうございます。学生自身カリキュラム改善に参画できると知らない人が多いことに関しては、カリキュラムに関する全国調査の結果をまとめた報告書を作成し、それを学生にも還元していくことで、より多くの学生がカリキュラム委員会等に参加する雰囲気を醸成したいと考えております。また、医学連が実施している省庁交渉についても、報告をホームページや医学連新聞に掲載し、周知を図ってまいります。

代議員 信州大学：来期の医学連のあり方について。今期は今までの活動を踏襲して活動してきました。自治会交流集会を行ったり、加盟校を増やしたりしてきました。外向きの活動をするには必要だが、同時に加盟校の利益も考える必要がある。もっと安心感を与える活動をする必要がある。加盟校を増やすことは、よりよい意見を集めるという点で大切だが、40期はより加盟校のための活動にシフトしていく必要があると考える。39期の医学連アンケートの分析に携わったら、カリキュラムの過密により、身体的精神的に不調を訴える学生が多くいることがわかった。本来は国民の健康を目指すべき存在が、心や体を病んでいるという非常に深刻な環境が浮き彫りになった。このような医学生の声、省庁交渉を通じて行政に伝える。今までやってきたことの意義を改めて問い直す、40期の活動にしていきたいと思えます。私は役員に立候補しています。40期、今申し上げた内容にしていきたい。

役員 高知大学：今までの医学連の活動に携わってきたの感想を話したいと思う。最初の中執報告などについて理解ができなかったが、この一年間通して色々な仕事をやってみて、中執報告とか聞いても理解できるようになっていた。今期はすごく大枠を理解できるようになったから、来期も立候補しているが、この1年間の流れを理解できたところから、いろんな仕事に携わったり、もっと一つのことに深く関わったりしていきたい。

役員 島根大学：アンケートについて、留年について、医学連大会について話したいと思えます。医学部のカリキュラムが学生の健康を阻害している。文科省に伝えると1/3は学校のカリキュラムに任せてるし、文科省として対応できないとのことだった。カリキュラムを改善するには各大学の協力連携が必要。学生の健康を阻害されないようなカリキュラムにしていきたい。全国の課題としてやっていきたい。先日、医師国家試験の結果が出たんですが出願しているのに受けていない学生が私立では20~30人いた。体調不良や留年によって受けられない学生がいたんじゃないかなと思う。私立大学の留年などは不透明な部分が多い。今回の医学連大会は初参加の方もいて、3年ぶりの対面開催。8校も自治会紹介をしてくれた。和歌山医科大学だったり、京都府立大学だったり、やるぞという大学がいて元気になれた。医学連は、色々な大学、加盟している大学・加盟していない大学、の支えがあって今の活動ができていると思う。今後も感謝の気持ちを持って活動していきたい。来期も立候補しているが、新しい医学連のメンバーと今の医学連を支えていきたい。

オブザーバー 群馬大学：決議案2章に関して、安心して学べる環境について話したいと思う。私の周りの友人たちの話。子育てと勉強の両立に奮闘している学生が多い。群馬大学は編入生が多い。15人など。私の学年はそのうちの14人が女性。3人が学期中に出産を経験しました。ワンオペで育児している。3

人休学は選ばなかったけれどその頑張りは尊敬に値するものすごいと思った。残念ながら1科目のせいで留年になった友人もいた。本当に寝る間も惜しんで、子どもとの時間を惜しんでいた。留年が決まった時期はすごく落ち込んでいた。そのような姿を見ていて、もう少しカリキュラムに余裕があったら、カリキュラムが柔軟であったら、このようにならなかつたのではと思わざるをえなかつた。そのような友人たちの姿がアンケート制作中に頭の中にあつた。自分も、休学も考えているが医学部のカリキュラムが柔軟だつたらと思います。子育てだけではなく、医学生はそれぞれ事情を抱えているはず。経済的な理由でアルバイトしなければいけないのもまたそう。大学の先生の対応や文科省・厚労省の話聞いて学生がただ勉強していればいいのではなく、色々な事情を持った大人という認識がなかつた。対等な関係である認識が欠如している。多様で人間性が豊かな医師を育てるためには、医学生が安心して学べる環境が大切だつた。これからも大学や国に声を届けることは大事。来期は関われませんが、皆さんの活動を応援します。

代議員 高知大学：医学連大会に初めて参加させていただきました。医学連大会の感想とこれから取り組みたい活動について。今回初めて医学連大会に参加させていただきましたが、全国の医学部自治会の方々が、どのような自治活動に取り組んでいるか、どのような悩みを持っているかがわかつた。医学部自治会の大学生に利益を還元できるような自分の大学で行動して、また医学連にもつて帰つてこれるようにしたいです。私がこれから取り組んでいきたいことについて述べさせていただきますと、自治会活動について取り組みたいことはもっと医学生がよりよい学習環境にいられるように、医学生のちょっとした悩みを解決できるように取り組んでいきたい。医学教育について、1年生向けにアンケートを実施してそのアンケートを解析することによってこの1年間の講義がどうであつたか、どの講義に改善点があるかどうかを確認し、これからの1年生に質の高い医学教育を提供できるように努めたいと思う。また、次期中執に立候補しているが、医学連で全国の自治会の人たちと交流して自治会活動を吸収して、自身の大学の自治会に還元できるようにしたい。

役員 信州大学：39期医学連では中央執行委員を務めた。医学連大会参加の感想を述べたい。自治活動や、医学連の活動はもちろん自分のためでもあるが、自分以外の困っている人のための活動だつたと思う。どうしても、自分のことで精一杯になってしまうと、周りの人がどのような状況なのか目が届かなくなってしまう。先ほどの群馬大学の方のお話を聞いたり、アンケートをとつて学生がどんなことに困っているかを実際に見ることによって、何が必要かが見えてくる。眼を閉じることなく、耳をふさぐことなく、取り組んで行きたい。

役員 和歌山県立医科大学：今期では、中央執行委員として活動していました。私は来期医学連で活動していく際の抱負を述べます。今年1年間活動して、わからないことや大変なこともたくさんありましたが、忙しい学生生活と両立して行くことができたのは、意義や楽しさを感じることができたからです。来季も役員として立候補、それに共感し仲間を増やしてくれるということもありますし、役員の負担の軽減であつたり、活動の向上にも繋がると思う。医学連という大切な場を残したいと考えています。

オブザーバー 国際医療福祉大学：ミャンマーで1年間ほど医学生をしていて、その大学で自治会連合にいったことがあつたので今回の医学連大会の三日間は懐かしかつた。自分の大学は、新しい大学で自治会の規約もないし、医学連に入るのにまだみちのりはあるが加盟へは前向き僕の大学も加盟することを前向きに考えていきたい。私立大学は、近畿大学だけだが、僕の大学も加盟大学になれたらいいなと思います。

オブザーバー 徳島大学：今期の振り返りと来期に向けて考えていることを話したい。今期、医ゼミの実

行委員の経験から医学連に参加しました。医ゼミを含め今期いろんなイベントに関わることで医ゼミを含め、いろいろな活動に関わる中で、個人的に、医学連というところはあったかい、心地の良い場と感じています。なんとなく、僕の中で消化できていないのが、徳島大学から来たが、オブザーバー参加であり、今後もオブザーバー参加せざるを得ないこと。徳島大学には自治会がなかった。過去にそういう方がいたけど順番が逆ではないかと思う。他の医学生のためにできてるし、徳島大学の子たちにもアンケートで貢献できているのではないかと思う。とはいえ、何もできていないわけではない。医学連で、全国の医学生のためにもできているし、高知の学生にアンケートを集めることもできた。来期は、医学連の中で自治会や団体のあり方を学んでいきたい。一方で、医学連の仕事がわかってきたので、社会の中での役割を考えながら、務めていきたい。

代議員 和歌山県立医科大学：僕は4月の医ゼミの新歓で、医ゼミについて知り、今年は和医大が主管だったことから、現地実行委員として携わりはじめました。その後、6月に第4回中央執行委員会でオブザーバーとして参加させていただき、7月の第5回中央執行委員会で書記局員として承認をいただいてから、約8ヶ月経ちました。今期途中からではありましたが、医学連の活動に関わってきて、学生の思いを実現させることの大切さを感じました。また、アンケートの分析に携わってみて、同じような悩みを抱えているにも関わらず、その和医大の自治会でも、今期医学連の活動を通して学んだことを生かして活動を盛り上げたいと考えております。また、ポスト医ゼミを和歌山で開催して、様々な経験をさせていただきましたが、やはり学生の自主的な学習の大切さも改めて感じました。私は、来期の中央執行委員に立候補させていただいております。今期の活動を踏まえ、来期は懇談などを通じた、自治会の橋渡しや、医学連の活動の広報に携わりたいと考えております。よろしくお願いいたします。

役員 和歌山県立医科大学：医学連には1年生のときの医学連大会に初めて代議員として参加しました。去年の大会で中央執行委員となり、一年の任期を務めさせていただきました。はじめて役員になってわからないことも多い中での活動でしたが、温かいメンバーの方々から囲まれて、非常にやりがいを感じることができました。来期の役員にも立候補しているので、先輩方から学んだことをもとに自分で動き、次の代に引き継いでいく一年にしたいと思っております。よろしくお願いいたします。

代議員 香川大学：参加資格は代議員です。医学連大会の感想。医学連大会の感想について、もう一人香川大学から代議員を連れてきた。この学生は、自治会の役員ではないが面白いと思ってくれたことが印象的。この場に来てみて、面白いなと感じたと言ってくれたのが印象的だった。個人的に仕事の話をするのはつまらないんじゃないかという懸念を持っていた。でも話してみると、面白いと感じてくれる人がいた。自治会活動もちゃんと怖じけずにちゃんと話してみたりすることが重要だなということを感じました。また、今回大会で話したカリキュラム改善委員会とかも話をしてくれたらよりよい学生生活に近づくんじゃないかなと思いました。

役員 弘前大学：一年生の時から、医学連に自分は書記局として携わった。私からは来期の医学連に願うことは、上級生になるので後輩にも目をかけていきたいです。ありがたいことに今回の医学連大会で1年生や2年生から医学連に関わってくれたメンバーが、活動しつづけられるようにしていきたい。今後の医学連の運営にも関わってくる。来期は役員として後輩に目を向けて、みんなが丸丸となって医学生がより良い学生生活を送れるように取り組んでいきたい。来期も立候補します。みなさんよろしくお願いいたします。

役員 高知大学：初めて医学連大会に参加したのは先輩からのお誘い。学年が上がるにつれ中執役員の歴

も長くなって、後輩にバトンタッチできるようになってきた。はじめここに参加した時は、役員としてやることは高知大学と医学連をつなげることと先輩に言われ、私はそれだけとりあえず頑張ろうと思ってやってきた。活動に慣れてきて、アンケート、省庁交渉もできるようになった。後輩たちに向けて、学年が上がってくると見える景色も違うと思うので、どんどん全国の活動にシフトしていってもらえたらと思う。

代議員 群馬大学：今回はじめて代議員として連れてきてもらいました。医学連っていう名前が不安でしたが、三日間を通して、真面目な団体だとわかって安心しました。医学連のアンケートの話が来たときは、文部科学省に提言しに行くことにどれくらい効果があるのかなと思っていました。ちゃんと集計されて分析されていて、提出されていると知りました。自分の学年は100人くらい提出してくれたが、みんなの声がちゃんと伝わっていることが分かり、自治会活動をやってきてよかったと思った。部活動が忙しくてどこまでできるかはわからないが、積極的に関わっていきたいなと思った。

役員 群馬大学：来年度に向けて。私は、これまで3年間中央執行委員として医学連の活動に関わってきました。群馬大学の中でも学友会の執行委員を務めており、大学内と医学連の活動を両立してやってきました。そんな中で今年度は群馬大学学友会が大きな困難に直面している。学生の声を受け止める活動をしっかりと行っていき、大学の中で、学生生活、あるいは教育をより良いものにできればと考えています。また、医学連と大学との橋渡し役として、全国的な活動と大学内の活動とに取り組んでいきたい。医学連の活動としても、国際医療福祉大学と連絡をとっている。今後、懇談や会話の場をしっかりと設けていき、加盟に向けて取り組んでいきたい。来期の中央執行委員にも立候補しているのでよろしくお願い致します。

代議員 山梨大学：先ほどの講演を聞いて疑問に思うことがあり、決意しました。海外の医学部の先生はなぜ学生と関わる時間が多いのかまた、なぜ日本の先生は生徒と関わる機会をもたない、あるいは少ないのか疑問に思ったので、医学連においても、自治会においても、日本でも学生と先生が関われるように努力をしていきたいと思いました。

オブザーバー 群馬大学：医学連での4年間の活動について話したい。1、2年の頃から学友会執行委員だった。1年のころには自治会活動はよく分からないという感じ、先輩たちと楽しく交流できるからなんとなく入った。1年生の最後の時に、35大会に参加して衝撃を受けた。自治会活動は何故やるのかと思っていたが、活動を全国各地で、魅力的な人たちが一生懸命やっていた自分もそういう人になってみたいなと思い、そのときは何もしなかったが、36大会で思い立って2年生の36大会に行った時に思い立って役員に立候補しました。医学連のことをいろんな人に知ってもらいたいという思いで、HPやTwitterの発信をしていた。自分のマイテーマということもあり、地域枠のアンケートをやった。省庁交渉だったり、記者会見だったり、大きな活動になったなど達成感を感じている。ここから委員長、副委員長とさせてもらって、医ゼミの方も楽しい思い出を作れた。医学連にはたくさんの思い出があって、大会準備期間だったり、関わらせてもらった。これまで医学連大会でどのように感じたかはそれぞれだと思うが、もし何か思っていたら、その気持ちを忘れずに持っていただいて、医学連や、各地の自治会ではっきりしてもらえたらと思います。6年生なので今年で卒業ですが、これからの活動も応援していますので、楽しいことと、自治会活動と体には気をつけてみんな頑張ってもらいたい。